

Title	蕭紅研究ノート その二 : 蕭紅作品年譜及び蕭紅研究文献資料
Author(s)	中川, 俊
Citation	大阪外国語大学学報. 50 p.55-p.69
Issue Date	1980-09-29
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80808">https://hdl.handle.net/11094/80808</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 蕭紅研究ノート その二

——蕭紅作品年譜及び蕭紅研究文献資料——

中 川 俊

## 蕭紅研究之二

——蕭紅著作系年目录及蕭紅研究文献資料——

中国女作家、蕭紅（1911—1942）是中国現代文学史上的一位頗有成就的作家，但是向来研究她的作品的人並不很多。最近，我看到她的中篇小说『生死場』很受感动。『生死場』是中国文学界最早反映东北农民在日帝統治下生活，挣扎和起来斗争的一部作品。关于『生死場』，我已在《野草》（中国文艺研究会刊）'80年26号上写了一篇文章，題目叫「蕭紅研究之一——关于『生死場』」。

之后，我依次阅读蕭紅的作品，同时也有意搜集了一些材料，加以整理了。正在这当儿，我偶然在《文学评论丛刊》4（中国社会科学出版社，1979年10月刊）上发现铁峰『蕭紅传略』（附录一「蕭紅著作系年目录」，附录二「有关介紹蕭紅及其作品的目录」）了。我以为这个材料内容既丰富又详细 可以做为一个很好的蕭紅研究的可靠基础。但是如前所述我也有一套材料搜集到的，也写成了一个年譜的。这两者，相形之下，材料虽然差不多一致的，但也有小部分不相同。因此，我就参照铁峰先生的材料，再加以我所另得，写出一部「蕭紅著作系年目录」了。根据各种材料，有时发现一事实材料之間的异同，或解释上的分歧，我就把它一一提出来写在「年譜」后面的一章里，加以解释，以待后考了。

我研究所得虽並未彻底，但想来还有点儿用处，也就予以发表了，希望大家指正。它的内容是：

- I 蕭紅著作系年目录
- II 「蕭紅年譜」与传记上的一些异同
- III 蕭紅研究上，我所搜集到材料的目录

上面这些材料，如果能对蕭紅这个女作家有关的人或想进行研究的人有一点用处的話，我就非常高兴的。

は じ め に

蕭紅は一九三〇年代、中国東北の生んだ個性的な女流作家であり、彼女の代表作『生死場』

は、九・一八事件（満州事変1931）後、亡国奴となることに甘じない東北農民の抵抗を、いちはやく描いたことで高く評価された。蕭紅は一九三〇年故郷の黒龍江省呼蘭県を逃れ出てより、一九四二年、三十一才の短い生涯をとじるまで、文字通り日中戦争の戦火の中を流浪しつつ、数多くの詩情あふれる作品を書きつぎ、香港失陥という太平洋戦争の渦中で、その薄幸な生涯を閉じた。

蕭紅は、同じく三十年代前後に文壇に登場した女流作家丁玲のように、激動する現代文学史の主流を歩みつづけて、成功と挫折そして栄誉ある回復を果すといった華やかな存在ではけっしてない。蕭紅は曾て批判をうけたこともない、というよりむしろ取り上げられることのあまりなかった作家だといえる。

最近私は、蕭紅と蕭軍共著の短編小説集『跋涉』の複製本を手にすることができた。これは一九七九年十月東北黒龍江省文学芸術研究所で再版されたものであり、表紙も蕭紅の手になる初版本そのままに装丁され、初版当時（1933）の息吹をそのままにつたえている。『跋涉』は作品のまえの扉に、蕭紅の詩「春曲」が編まれ、いわば彼ら二人の文学への出発点にたつ記念碑的な意味をもっていた。しかし、この自費で出版された一千部の『跋涉』が、書店に運びこまれて間もなく、当時の満州国政権と日本の当局によって差し押えられ、没収されてしまった。思えばそれ以後、実に四十数年の間、この『跋涉』は日の目をみることなく眠っていたことになる。しかし最近では、中国で、蕭紅について、詳細に且つ豊富に文献資料が発表されるようになり、蕭紅研究に新しい視野を提供している。「蕭紅研究ノート その二」とした「蕭紅作品年譜」は、これらの資料を参照しつつ、私が別に入手し、集めていた資料を基礎に作成した。そしてその過程で行き当たった伝記についての問題点を、「年譜」の補足とともに書きそえた。

なお「蕭紅研究ノート その一」では『生死場』について（《野草》中国文芸研究会刊 1980年26号）とりあげたが、今後また機会があれば、蕭紅の後期の作品もとりあげたいと思っている。

# I、蕭紅作品年譜

事 項	作品名・執筆年月日・(出版年月日)・掲載誌 単行本
<p><b>1911年</b></p> <p>黒龍江省呼蘭県の地主の家庭に生まれる。本名は張廼瑩<sup>チャンナイイン</sup>。(のち、蕭紅、悄吟の筆名がある。)</p> <p>呼蘭県には祖父、張維禎<sup>チャンウェイチン</sup> (1849—1929) の代に、阿城県福昌号屯から移り住んだ。蕭紅が生まれた時、祖父は60才をこえていたが、蕭紅を愛しみ、彼女の幼少の時期は、ほとんど祖父の庇護のもとに成長した。</p> <p>父、張廷舉<sup>チャンテイジュ</sup> (字は選三、1888—1960) は3才の時、母を亡くし、12才の時、四番目の伯父、張維禎の養子としてむかえられた。呼蘭府初高両級小学校長、教育局長、黒龍江省教育庁秘書などを歴任し、九・一八事件(満州事変1931)以後は、満州国呼蘭県協和会長をつとめたことがある。</p> <p>蕭紅が9才の年に母が亡くなり、同年10月父は再婚した。</p>	
<p><b>1923年 (12才)</b></p> <p>呼蘭県立北関第二初高両級小学校 初級小学卒業。</p>	
<p><b>1925年 (14才)</b></p> <p>呼蘭県立北関第一小学校 高級小学卒業。</p> <p>のち、ハルピン市立第一女子中学に学ぶ。</p> <p>この頃、蕭紅の父は彼女の婚約をとりきめていた。</p>	
<p><b>1930年 (19才)</b></p> <p>第一女子中学を中退し、父の家を出る。</p> <p>ハルピンである青年とともに住む (⑫では1932年、⑬では1931年)</p>	

事 項	作品名・執筆年月日・(出版年月日)・掲載誌 単行本
1931年 しばらく北京に住んだが、またハルピンにもどる。	
1932年 (21才)	
ハルピンではある旅館に止宿したが、生活は窮迫し、ついに《国際協報》文芸付録版編集部にもその窮状を訴えた。懐妊した蕭紅がひとり旅館にとり残され、数百元の宿泊代が未払いであった。	短詩「春曲」32.7 悄吟 (《国際協報》付録版——以下《国協》付と略称、のち『跋涉』所収)
すでに三郎の署名で小説「孤雛」を《国際協報》に連載していた蕭軍と知り合う。	
出産、子供は人に養育してもらうことになる。	
蕭軍と同棲。欧羅巴(ヨーロッパ)旅館(ロシア人経営)に一カ月余り住む。	
11月 道里商市街25号に移る。	
1933年 (22才)	
10月 三郎、悄吟共著 短編小説集『跋涉』を友人の援助を得て自費出版一千部 ハルピン五画印刷社 蕭紅自身が装丁。	小説「王阿嫂的死」33.5.21 悄吟 (《国協》付、『跋涉』) 小説「看風箏」33.6.9 悄吟 (《国協》付、『跋涉』) 小説「啞老人」上 悄吟 (33.8.27 《大同報》“夜哨”周刊3期——以下“夜哨”と略称)
しかしこの本が書店に送られてから数日を経ずして発禁にあい、没収された。	小説「啞老人」下 悄吟 (33.9.3 “夜哨”4期) 小説「夜風」上 悄吟 (33.9.24 “夜哨”6期) 小説「夜風」中 悄吟 (33.10.1 “夜哨”7期) 小説「夜風」下 悄吟 (33.10.8 “夜哨”8期、『跋涉』) 散文「兩個青蛙」悄吟 (33.8.6 “夜哨”創刊号) 散文「小黑狗」33.8.1 悄吟 (33.8.13 “夜哨”1期、『跋涉』) 散文「廣告副手」33.9 悄吟 (『跋涉』) 散文「葉子」悄吟 (33.10.15 “夜哨”9期) 散文「清晨的馬路上」上 悄吟 (33.11.5 “夜哨”12期) 散文「清晨的馬路上」下 悄吟 (33.11.12 “夜哨”13期) 散文「渺茫中」悄吟 (33.11.26 “夜哨”14期) 散文「一天」33.12.8 (『蕭紅散文』) 散文「煩擾的一日」一 33.12.8 悄吟 (33.12.17 “夜哨”17期) 散文「煩擾的一日」二 33.12.8 悄吟 (33.12.24 “夜哨”

事 項	作品名・執筆年月日・(出版年月日)・掲載誌 単行本
<p>1934年 (23才)</p> <p>5月 蕭紅と蕭軍は九・一八事件以後、東北ハルピンを逃れて、青島に至り、観象山の麓(観象一路一号)に住む。舒群夫妻が同居。蕭軍は《青島晨报》(中国共産党の外郭組織の発刊していた新聞)付録版の編集を担当。またこの時期に蕭軍は魯迅と通信をはじめる。</p> <p>10月末 青島からさらに上海へ逃れる。</p> <p>11月30日 内山書店で魯迅とはじめて会う。</p> <p>12月19日 魯迅の招待をうけ梁園豫菜館で茅盾、聶紺弩、葉紫らを紹介された。</p> <p>1935年 (24才)</p> <p>7月 魯迅は16日付蕭軍宛書簡のなかで、蕭紅との同棲三週年紀念を祝す。</p> <p>11月6日 蕭紅は蕭軍とともに魯迅より晚餐への招待をうけ、この頃より彼らの魯迅宅への訪問が頻繁となる。</p> <p>魯迅は彼らにA. スメドレーを紹介し、茅盾の通訳で東北義勇軍の闘争についてなどを話す。</p> <p>12月 中編小説『生死場』出版。国民党の検閲機関に半年も放置されたすえ不許可となり、魯迅はそこで奴隸社の名義で自費出版した。</p> <p>1936年</p> <p>春の初め蕭紅と蕭軍は、魯迅の住む大陸新村に近い北四川路に移転。</p> <p>7月15日 蕭紅は、魯迅と許広平の</p>	<p>18期、『橋』)</p> <p>散文「破落之街」33.12.27 (『橋』)</p> <p>小説「進城」悄吟 (34《青島晨报》付録版)</p> <p>中編小説「生死場」34.9.9 (35.12上海容光書店 魯迅編集『奴隸叢書』三)</p> <p>散文「皮球」34.3.16田娣 (34.3.28《国協》付、『蕭紅散文』所収)</p> <p>散文「蹲在洋車上」34.3.16 (掲載誌不詳)</p> <p>散文「小六」35.1.26悄吟 (35.3.5《太白》1巻12期、『中国新文学大系』続編7集)</p> <p>散文「搬家」35.1.26悄吟 (『蕭紅散文』)</p> <p>散文「過夜」35.2.5 (『中国新文学大系』続編7集)</p> <p>散文「黑夜」35.2.5悄吟 (『蕭紅散文』)</p> <p>散文「初冬」35. 初春 悄吟 (『蕭紅散文』)</p> <p>散文「索非亞的愁苦」35年 (『蕭紅散文』)</p> <p>散文「餓」悄吟 (35.6.1《文学》4巻6号)</p> <p>散文「三個無聊人」35.6.12悄吟 (35.8.5《太白》2巻10期、『蕭紅散文』)</p> <p>散文集『商市街』35.5.15完成 悄吟</p> <p>小説「手」36.3 (36.4《作家》1巻1号、『小城三月』)</p> <p>小説「橋」36年 (『小城三月』)</p> <p>小説「馬房之夜」36年 (36.5《作家》1巻2号)</p>

事 項	作品名・執筆年月日・(出版年月日)・掲載誌 単行本
手あつい送別をうけて、上海を離れ日本（東京）に至る。蕭軍も上海を去り青島にむかう。	小説「王四的故事」36年（36.9.20《中流》1巻2期） 小説「牛車上」36年（36.10.1《文学月刊》1巻5期） 詩「苦杯」十一首（うち二首 姜德明「魯迅与蕭紅」78.11.5）
8月 散文集『商市街』悄吟 出版。	自伝「永久的憧憬和追求」36.12.12（37.1《報告》1期、37.2.15《月報》1巻3期）
11月 散文集『橋』悄吟 出版。	散文「訪問」36.1.7（『蕭紅散文』） 散文「夏夜」36.2.21（『蕭紅散文』） 散文「離去」36.1.13（『中国新文学大系』続編7集） 散文「欧羅巴旅館」悄吟（36.7.1《文学季刊》1巻2期） 散文「隨筆兩篇：“第十三天”、“最后的一星期”」悄吟（36.8.1《文学月刊》1巻3期） 散文「紅的巢園」36.9（36.10《作家》1巻6号） 散文「孤独的生活」36.8.9悄吟（36.9.5《中流》1巻2期） 散文「家族以外の人」36.9.4（上 36.10《作家》2巻1号、下 36.11《作家》2巻2号） 書簡「海外的悲悼」36.10.24（36.11.5《中流》1巻5期、⑦附件之一） 書簡第一信（由船上寄）36.7.18～第三十四信（東京）36.12.末日（79年蕭軍「蕭紅書簡輯存注釋録」一、二、三）
<b>1937年</b>	
春、東京より上海に帰国し、蕭軍とともに法租界呂班路（現在の重慶南路）256弄に住む。	詩「沙粒」三十四首 37.1.3悄吟（37.3.15《文学叢刊》1巻1号）
のち、約一カ月北京に滞在。	詩「拜墓——爲魯迅先生」（37.6.10《好文章》9期、姜德明「魯迅与蕭紅」78.11.5）
5月 短編小説集『牛車上』上海文化生活出版社出版。	散文「天空的點綴」37.8.14（37.10.16《七月》1集1期）
10月 上海失陥にともない、蕭軍とともに武漢に至り、武昌小金龍巷に住む。武昌滞在は約三ヶ月。この間、胡風、聶紺弩らと文芸月刊《七月》を共同編集する。	散文「失眠之夜」37.8.22（37.10.16《七月》1集1期） 散文「在東京」（37.10.16《七月》1集1期） 散文「火綫外兩章：“窗边”、“小生命和戰士”」（37.11.1《七月》1集3期） 散文「一條鉄路的完成」37.11.27（37.12.1《七月》1集4期、『蕭紅散文』） 散文「一九二九年的愚昧」37.12.13（37.12.16《七月》1集5期） 書簡第三十五信（東京）37.1.4～第四十二信（北京）37.5.15（79年蕭軍「蕭紅書簡輯存注釋録」三、四）
<b>1938年</b>	

事 項	作品名・執筆年月日・(出版年月日)・掲載誌 単行本
1 月 山西民族革命大学の招聘に応じ、蕭軍、聶紺弩、艾青らとともに山西臨汾に至り、蕭紅は文芸指導にあたる。	散文「“大地の女兒”与“動亂の時代”」38.1.3 (38.1.16 《七月》2集2期) 散文「記鹿地夫婦」(38.5.1《文芸陣地》1卷2号) 散文「無題」(38.5.1《七月》3集2期)
2 月 民族革命大学は、日本軍の臨汾進攻に備えて郷寧へ撤退を開始し、蕭軍は革命大学に留まることとなり、蕭紅はたまたま立ちよった西北戦地服務団(団長 丁玲)について西安にむかう。	散文「魯迅先生記」一 38年(『蕭紅散文』) 散文「魯迅先生記」二 38年(『蕭紅散文』、この文章は「在東京」37年を改題したもの) 話劇「突撃」蕭紅、塞克、聶紺弩、端木蕻良共編(38.4.1《七月》2集12期) 小説「黄河」38.8.6 (39.2.1《文芸陣地》2卷8期)
4 月 蕭紅は漢口にもどる。西北の旅の後、蕭紅と蕭軍は双方同意のもとに訣別。	
9 月 蕭紅は漢口から重慶に出て歌樂山に住む。出産したが、体の衰弱甚だしく子供は間もなく死亡。	
<b>1939年</b>	
長編小説『呼蘭河傳』を重慶で書きはじめ、この年の暮香港で完成。重慶北碚で端木蕻良とともに住む。小説集『曠野の呼喊』出版。	回想記『回憶魯迅先生』39.10.26(「後記」重慶でしるす) 小説「朦朧的期待」(曠野的呼喊』、『小城三月』) 小説「曠野的呼喊」(『曠野的呼喊』) 小説「逃難」(同上) 小説「山下」(同上、39年《天下文章》1号中国文化服務社) 小説「蓮花池」(『曠野的呼喊』) 小説「孩子的講演」(同上) 散文「牙粉医病法」39.1.9(『蕭紅散文』) 散文「滑竿」39年春(同上) 散文「林小二」(同上) 散文「長安寺」39.4(同上) 散文「放火者」(同上) 散文「轟炸前后」(39.8.20《魯迅風》18期) 散文「魯迅先生生活散記」(39.11.1《文芸陣地》4卷1期) 散文「亂離中的作家書簡」(39.4.5《魯迅風》12期)
<b>1940年</b>	
春、蕭紅と端木蕻良は、孫寒冰の招聘をうけて香港に至り、端木蕻良は《シンガポール日報》付録版の起草を担当。	小説「後花園」(40.4.10—40.4.25香港《大公報》“文藝”、“学生界”に連載) 長編伝記小説『呼蘭河傳』40.12.20(41年桂林河山出版社)



事 項	作品名・執筆年月日・(出版年月日)・掲載誌 単行本
<p>蕭紅はもともと虚弱な体質のうえに、長年にわたる流浪の生活が加わり、肺結核に犯されて、病状はすすんでいた。</p> <p>単行本『回憶魯迅先生』重慶生活書店出版。</p> <p>小説集『五行山血曲』蕭紅等 文藝突撃叢書社出版。</p> <p><b>1941年</b></p> <p>A. スメドレー（延安を訪れて帰国の途次香港にたちよった）のすすめで、瑪麗病院に入院。さらに戦局が急迫していたので、シンガポールへ避難することをすすめられ、蕭紅自身も望んでいたが果さなかった。</p> <p>12月 太平洋戦争に拡大し、香港が進攻されたとき、病状はかなり進んでいて、移転は不可能であった。</p> <p>長編伝記小説『呼蘭河傳』（桂林河山出版社）出版。</p> <p>散文集『蕭紅散文』（重慶大時代書局）出版。</p> <p><b>1942年</b></p> <p>1月13日 跑馬地の協和病院で、喉頭部腫瘍（喉頭瘤）の診断により手術をうける。</p> <p>18日 誤診であったともいわれ、急遽また瑪麗病院に移される。</p> <p>19日 声を出すことができず、最後の言葉を書き遺す。</p> <p>「我將与藍天碧水永处、留得那半部“紅樓”給別人写了」</p> <p>「半生尽遭白眼冷遇……身先死，不甘，不甘。」</p> <p>22日 午前10時（または11時）息をひきとる。享年31才。</p> <p>24日 遺体は跑馬地の裏の日本の火葬場で火葬に付された。</p> <p>25日 香港浅水湾（リパルス・ベイ）の墓地に葬られた。その地は麗都花園（リッツ・ガーデン）の海辺に近い。</p> <p>1957.8.15 中国作家協会広州分会は、蕭紅の遺骨を広州郊区の銀河公墓に移して葬った。</p>	<p>長編小説『馬伯樂』（43年桂林大時代出版社）</p> <p>啞劇「民族魂魯迅」（40.10香港《大公報》文藝付録版）</p> <p>小説「小城三月」（41.7.1《時代文学》1巻2号、『小城三月』）</p> <p>小説「紅玻璃的故事」蕭紅遺述，駱賓基撰（43.1.10《人世間》1巻3期）</p> <p>散文「給流亡異地的東北同胞書」41.8.（41.9.1香港《時代文学》（周鯨文、端木蕻良主編）1巻4号、⑬「蕭紅の最后一篇文章」）</p>

### 蕭紅著作集（単行本）

短編小説集『跋涉』三郎、悄吟共著 1933年10月 ハルピン五画印刷社

中編小説『生死場』1935年12月 上海容光書店 魯迅編集《奴隸叢書》之三 魯迅「序言」

散文集『商市街』悄吟 1936年8月 上海文化生活出版社 巴金主編《文学叢刊》第二集所収

散文集『橋』悄吟 1936年11月 上海文化生活出版社 巴金主編《文学叢刊》第三集所収

短編小説集『牛車上』1937年5月 上海文化生活出版社 巴金主編《文学叢刊》第五集所収

短編小説集『曠野的呼喊』1939年 重慶大時代書局

回想記『回憶魯迅先生』1940年 重慶生活書店（附録：許壽裳「魯迅的生活」、景宋「魯迅和青年們」）

小説集『五行山血曲』蕭紅等 1940年 文藝突擊叢書社

長編伝記小説『呼蘭河傳』1941年 桂林河山出版社（1947年上海寶星書屋再版：茅盾「呼蘭河傳」序）

散文集『蕭紅散文』1941年 重慶大時代書局

長編小説『馬伯樂』1943年 桂林大時代出版社

小説集『蕭紅選集』1958年12月 人民文学出版社

短編小説集『小城三月』（1970年2月 香港上海書局再版）

### 《付記》

○でかこんだ番号はⅢ「蕭紅研究文献資料」の資料番号を示す。

『』は単行本、〈〉は季刊、月刊誌、新聞などを示す。

### Ⅱ、「蕭紅年譜」と伝記についての疑問点

ここでは「蕭紅作品年譜」“事項”部分の補足を加えながら、蕭紅伝記のなかで、もっとも資料間の異同のはげしい1930—'32に焦点をあてて、諸説をあとづけてみたい。

#### 1. 呼蘭県の時期（1才—17才）1911—1928

蕭紅は1911年、黒龍江省呼蘭県鎮南河沿の地主、張家に生まれた。生まれ月日には、現在なお二つの説がある。

1) 1911年6月2日 即ち清宣統3年5月6日。（資料⑬）

2) 端午の節句に生まれた子供は、縁起がよくないという古い慣習によって、3日おくらせ、5月8日とした。（資料⑪）

と、すれば蕭紅は1911年6月1日または2日に生まれたことになる。

張氏家系について、述べている「東昌張氏宗譜書」（資料⑬）とは、「1936.8創修」ということ以外に、まったく未確認、未詳の資料ではあるが、そこに記述されている概要を以下に抄

訳しておく。

「蕭紅の祖先は、山東東昌府莘県に居住し、嘉慶年間（1796—1820）に、即ち曾祖父の代に黒龍江省阿城県福昌号屯に移り住んだ。当時曾祖父兄弟三人は、呼蘭、克山、蘭西、榆樹、阿城など数県に広大な土地を所有し、また雑貨、穀物などをも大口にあつかう東北きっての豪商でもあった。しかし蕭紅の祖父の代にいたって、内陸の広大な農村地帯に対する日・露帝国主義の経済侵略と、さらに馬紅眼の指導する農民蜂起軍による手いたい打撃をうけてより、この新興地主、豪商もようやく没落にむかった。やがて張家の大家族は崩壊と離散のうきめにあい、祖父は呼蘭県土地を分与されて阿城県から移り住んだ。祖父の若い頃には、家業はまだ隆盛期にあったが、中年に分家して呼蘭県に移ってより、長女、次女が嫁し、さらに幼児を失ってからは、淋しい生活であった。そこで父方の従弟にあたる張維嶽の第三子張廷挙を後継ぎとして養子にむかえた。

張家を実質的にとりしきっていたのは祖母であった。祖母范氏（1845—1917）は諸事に長け、なかなかの遣り手であり、まことに手きびしい「地主老夫人」であったといわれる。一家の管理から手をひいていた祖父は、日がな一日裏の広い花園で、植木や草花の手入れにしたしんだ。手きびしい点では、養子であった蕭紅の父親もまたその吝嗇ぶりを情容赦なく発揮した。蕭紅のその後の作家形成に大きな影響をあたえたと思われる家庭環境は、いわば没落の道をたどる地主階級の一つの典型的な様相を帯びていたといえるのではないだろうか。

## 2. ハルピンの時期（18才—23才）1929—1934

ハルピンで在学していた市立第一女子中学は、「手」36、「一條鉄路的完成」37、「一九二九年の愚昧」37などの作品の背景となっている。彼女の在学期間について、二つの見方がある。

1）初級中学二年級で（1930年夏）退学。②

2）ハルピン市東省特別区立第一女子中学（現在の第七中学）に高級中学二年級まで学んだ。⑪

この頃、蕭紅の興味は、絵画と文学にむけられ、とりわけ絵画に傾倒した。これには「第一女子中学の絵の教師（上海美術專科学学校出身）の影響もあった」②らしく、後年『跋涉』や『生死場』の出版に、彼女自身筆をふるって施した大胆な且つ凝った装丁に、彼女の絵画に対するなみなみならぬ情熱をうかがうことができる。文学では「中学の教師がアプトン・シンクレアの小説『石炭王』や易坎人（郭沫若の筆名）訳『屠場』や冰心の散文、徐志摩の詩、茅盾の小説を紹介した。『屠場』と『石炭王』は1929年当時流行した翻訳小説であったが、蕭紅はこれらの翻訳小説よりも《国際協報》付録版の文章の方に興味を感じていた」②といわれる。

この時期に、上記の教師とともに、もう一人登場する小学教員李潔吾は、資料⑫の註釈によれば「李は1978年の蕭軍註釈「蕭紅書簡北平——上海」によくあらわれる友人であり、中共地下党員ではなかったかとも言われ、彼らの友情は抗戦前後までつづいた」と記されている。したがっ

て、蕭紅が第一女子中学を中退して家を出た後もこの青年との交友関係は持続されていくが、同時に彼女が家を出た1930年から、蕭軍が登場する'32年にいたる二年間は、蕭紅の伝記をとおして、もっとも資料間の異同のはなはだしい時期である。

そこで趙聰②、駱賓基②、⑫、姜徳明⑪、鉄峰⑬をえらんで各説を年毎に並記し、それらの相違点を先ずとり出しておきたいと思う。(以下駱賓基は駱と略記)

### 1930年

趙聰② 蕭紅は学んでいた学校のある青年教師を慕うようになった。父母はもともと彼女の許婚者をきめていたので、彼女は家を出て、家庭との関係を絶ち、ハルピンに出て、二人は新しい生活に入った。

駱賓基② 蕭紅の父はすでに彼女の結婚をとりきめていた。婚約者の家長は、当時東三省で著名な將軍の一人で、後に「満州国の支持にまわった有力な漢奸」であった。夏、蕭紅は結婚のために、初級中学二年級で中退させられた。秋、彼女はその封建的な家庭を逃れて、ハルピンに出た。そこには李という青年(法政大学の学生とも、第一女子中学の教員ともいわれる)が待っていて、彼女を北京にともなった。蕭紅は北京の彼の家を訪れて、はじめて彼が独身ではなかったことを知り、李の許を去ってハルピンにもどった。

姜徳明⑪ 蕭紅は結婚のために退学させられた。のち吉林省阿城県の伯(叔)父の家に身を寄せた。

鉄峰⑬ 蕭紅の父は1924年すでに呼蘭県駐軍第統の息子汪殿甲と蕭紅との婚約をとりきめていたが、この年の春、汪家は蕭紅と李潔吾の交際を理由に、婚約の破棄を申し出た。彼女の父親は彼自身の声望と家風に傷がつくことを恐れ、同意しなかったが、これを機会に彼女を退学させた。しかし蕭紅は新思想の影響を深く受け、自由、解放を渴望し、自己の憧憬と追求をもった進歩的な女性であった。蕭紅が家に帰って後、家族はみな、彼女は共産党思想の影響を受けたために悪くなったのだとみなして、誰も彼女を相手にしなかった。彼女はその苦痛をお酒によってやわらげるようになったが、娘の飲酒ということが、さらに彼女の家族内での孤立化をまねくこととなった。

夏、各地に反日愛国運動と農民の地主に対する小作料引上げに反抗する運動が広範囲に高まり、蕭紅の継母は、蕭紅姉弟をともなって阿城県福昌号屯の伯父の家に寄宿した。この頃、伯(叔)母が家庭内で孤立している蕭紅に同情し、彼女に家を出ることをすすめた。ハルピンへ出た蕭紅は、はじめ学友のもとに身を寄せたが、生活の経済的な逼迫のもとで、やむをえず李潔吾と道外区の小さな旅館に住んだ。生活は苦しく、彼女は町角で繕い婦となって働き、口を糊した。

### 1931年

趙聰 蕭紅を旅館に残したまま、その青年は帰らず、彼女は懐妊していた。そこで彼女は阿片によってその苦痛をまぎらせ、一時は中毒症状を呈するまでになった。

駱② 北平に出た蕭紅は、北平女子師範大学附属中学に32年春まで学んだ。この頃父のきめていた許婚者が彼女の後を追って北平に至り、執拗にからみ、蕭紅はこの時もはやこの許婚者の手をふりきることができなかった。彼女の学費などの経済的な負担は、何らかの形でこの許婚者が負っていた可能性がある。

姜徳明 9月24日中秋節の二日前、地主である伯父との思想的対立から伯父の家を出てハルピンに至り、これより流浪の生活がはじまった。

姜徳明が紹介しているもう一つの説は、蕭紅が二十才の年、父が旧軍人の子弟に嫁することを彼女にせまり、彼女は封建的な「請負い結婚」に反対して、父の魔手をのがれ、これより流浪の生活がはじまった。

鉄峰 夏、李潔吾は大学を卒業したが、ハルピンでの就職難から、蕭紅と李潔吾（蕭紅の弟も同行）は北京に出た。しかし北京でも李潔吾には蕭紅の面倒をみる手だてがたたず、彼女自身も李潔吾を苦しめるに忍びず、10月—11月の間にハルピンにもどった。彼女が、李潔吾の結婚を知ったのは1937年二度目に北京へ行ったときのことであり、当時彼はまだ結婚してはいなかった。

ハルピンにもどった彼女はよるべなく、婚約者の汪殿甲を訪ねたが、汪家の母に追い出された。しかたなく次の日ハルピン東北特別区立第二中学に、彼女の二番目の姉と妹をたづねた。姉妹は彼女の苦境をみ、二中学監の同意をえて、彼女を高級一年級に編入させた。しかし間もなく蕭紅は彼女の婚約者にうまくそそのかされて二中を退学し、道外区のある旅館に住んだ。

### 1932年

趙聰 春、旅館には400元あまりの宿泊代がたまり、そのうえ蕭紅は出産をひかえていた。旅館主はその支払いを迫ったので、蕭紅はついにハルピンの《国際協報》社に窮状を訴えた。この新聞の編集主任はただちに彼女を訪ね、その悲惨な状況をみて、彼女の解放を旅館主とかけあったが、みもらなかった。たまたま松花江が氾濫し、その旅館も被災の危険にさらされたので、ついに旅館主もこの条件をのみ、彼女は旅館を出ることができた。この新聞の編集主任は、彼女を自宅にひきとった。彼女は阿片を絶ち、文章を書くことを学んだ。やがて《国際協報》の付録版に彼女の小品文が載るようになった。悄吟というペンネームで、少女の身のこまごましたことを書いたものであったが、文章は清新で、注目された。悄吟の小品文が載る以前に、この新聞には三郎（蕭軍）の署名で散文がよく載り、人たちの注目をあつめていた。三郎は悄吟と文字の縁で知り合い、彼は蕭紅に求めて、二人は同棲した。

駱② 秋、松花江が氾濫した時、当時ハルピン国際協報付録版編集者白朗は、市街地区の救援を求めた蕭紅の手紙を受けとった。この消息が進歩的な思想陣営の間にひろまり、三郎という詩人と散文作者劉らが蕭紅の旅館をたづねた。

駱② 春、蕭紅は北平女子師範大学附属中学を中退し、婚約者ととともに北平からハルピンにいた

り、旅館に住んだ。しかし彼は600元余の負債をのこし、消息を絶った。そこで彼女は国際協報文芸付録版編集部にその窮状を訴えた。彼女は付録版の作品の中から、左翼文芸運動の“プロ”文学の匂いをかきとり、付録版編集者を通せば、友人や同志を求めうると信じた。その結果、当時三郎の筆名の蕭軍が、付録版編集主任の依託をうけて旅館に彼女をたづねた。

姜徳明 蕭紅は道外区の旅館で、食費と部屋代を滞納したために、旅館主から禁足をうけた。孤立無援のなかで、彼女は自身の境遇を短詩にこめて《国際協報》付録版に投稿し、救援の手を求めた。当時ハルピンにいた蕭軍は、折から松花江の洪水をおかしてボートを漕ぎ出して飢餓状態の蕭紅を救い出した。蕭紅は苦難のなかで蕭軍とめぐり合い、これより蕭軍と生活をともにして新しい歩みを開始した。

鉄峰 蕭紅は汪殿甲と半年余り旅館に住んだが、汪は600元の負債と、懐妊した彼女をおいて帰らなかった。李性菊（弟の妻）の語るところでは、彼女は露店の粥売りのところに行き、碗や箸を洗う仕事を手伝って口を糊した。旅館主は身よりのない彼女を妓楼に売りわたして、欠損にかえようとした。こうした苦難のなかで、当時進歩的な新聞《国際協報》付録版の編集者裴馨園に、手紙を書いて救援を求めた。この消息が進歩的な作者の間に伝えられたが、当時の日・満による暗黒統治の下では、彼ら自身の生活の維持すら困難な状況にあった。まして蕭紅の負債を肩替わりすることは不可能であり、ただ精神的、道義的な支援を送りうるだけであった。7月12日裴馨園の代理として、《国際協報》付録版編集担当の蕭軍と舒群がみんなの気持を帯して旅館をたづね、旅館主に、今後蕭紅に対する、彼女を損ねるいかなる行為をも許さぬことを厳重に警告し、ここで蕭紅の境遇は、はじめて改善された。秋、松花江が氾濫し、被災した旅館を、その混乱のうちに出て、裴馨園の家に移った。彼女は間もなく病院で出産したが、退院後、裴は五元を包んで使いのものに托し、彼ら（筆者註——蕭軍と蕭紅のこと）が自身で生活の道を求めるようにすすめた。彼らはやむをえず、この五元をもって道里11道街のあるロシア人経営のヨーロッパという旅館の一間を借り、これより蕭紅と蕭軍は同棲することになった。

以上に述べた各資料の異った諸説を通して、蕭紅が生きた軌跡として明確になった点は、父のきめた結婚を拒否して、家を出たものの、蕭紅は、実社会での第一歩で、まことにあっけなく挫折した。それほどにおさなさのぬけきらぬ娘ではあったが、しかし経済的、精神的な打撃に耐えながら、自らの筆一管にたよって、そのどん底から立ち上った。そして蕭紅の挫折から再起への過程に、国際協報社と蕭軍が介在していたことがはっきりした。彼女の挫折にどのような人物が、どうかかわり、また彼女の再起に国際協報社がどのようにかかわったかという具体的な記述になると、各資料間に異同があらわれる。その異同の傾向は、一つには、ここにあげた四種の資料のうち、趙聰②は香港側の資料であり、他の三種とは執筆の立場を異にしている。さらに他の三種の資料を出版年次別にみると、駱賓基②46年②80年、姜徳明①179年、鉄峰①379年で、駱賓基

②を除けば、他の資料はすべて79年、80年に書かれたものであり、駱賓基の②と⑫を比べてもわかるように、最近のものほど複雑な記述になっている。しかしその複雑さはときには、蕭紅の生きた事実の詳しい再現をめざしながらも、にもかかわらず、蕭紅の伝記本来のすがたから逆に遠去かっていくように思われる。鉄峰⑩の資料を例にとれば、彼は蕭紅の家族や知人、友人の言葉を引用しながら、蕭紅の当時の生活や環境を説明する。それはそれなりに鉄峰説の信憑性を立証しうるかもしれない。しかし蕭紅の妹なり弟の嫁、蕭軍などが、伝記の記述の中で、その比重を増してくるにつれ、蕭紅自身の主体性はますます稀薄なものとなり、他の資料に比べ鉄峰の蕭紅は、悲惨な境遇に翻弄されるばかりの、最も惨めな蕭紅像を現出している。にもかかわらず鉄峰は、30年代初期の蕭紅を、「新思想にめざめた、自由解放を渴望する進歩的な女性」とみるので、このような観念——めざめた意識、堅実な意志、と現実——彼女の実生活にみられる蕭紅の主体性の喪失、とが一個の人間として、蕭紅のなかにどのように位置づけられるのか、このように人格的に分裂した鉄峰の蕭紅観に疑問をいだかざるを得ない。

以上、最近の蕭紅伝記について、年譜作成の過程でいただいた疑問点に、いささかふれておいた。

スペースの都合で、「年譜」についての補足も、その多くを割愛せざるを得ないが、なお残された不十分な点は、みなさまのご指正をお願いしたいと思う。 (1980. 5. 20)

### Ⅲ、蕭紅研究文献資料

- ① 蕭紅自傳「永久的憧憬和追求」(《報告》一期37. 1、⑪)
- ② 駱賓基『蕭紅小傳』(「後記」1946. 11. 19 上海建文書店 1947. 9再版)
- ③ 尚今『中国新文学大系』続編 第四集(小説三集)「導言」(1964. 7. 3執筆)
- ④ 蕭軍「蕭紅書簡輯存注释録」一(《新文学史料》第二輯 香港三联書店 1979. 2)
- ⑤ 蕭軍「蕭紅書簡輯存注释録」二(《新文学史料》第三輯 香港三联書店 1979. 5)
- ⑥ 蕭軍「蕭紅書簡輯存注释録」三(《新文学史料》第四輯 香港三联書店 1979. 8)
- ⑦ 蕭軍「蕭紅書簡輯存注释録」四(《新文学史料》第五輯 北京人民文学出版社 1979. 11)
- ⑧ 蕭軍「我们第一次应邀参加了鲁迅先生的宴会」(《人民文学》1979. 5期)
- ⑨ 鲁迅——蕭軍宛書簡『鲁迅書信集』下 人民文学出版社 1976. 8
- ⑩ 鲁迅『鲁迅日記』下 人民文学出版社 1959. 8
- ⑪ 姜德明「鲁迅与萧红」(『新文学史料』第四輯 1979. 8)
- ⑫ 駱賓基「生死场、艰辛路——肖紅簡传」(《十月》1980. 1期)
- ⑬ 鉄峰「萧红传略」(《文学评论丛刊》4 中国社会科学出版社 1979. 10)
- ⑭ 蕭紅著作系年目录(⑬附录一)
- ⑮ 有关介绍蕭紅及其作品的目录(⑬附录二)
- ⑯ 蕭紅生平及著作年表(⑦附件之五)

- ①7 聶紺弩「在西安——回忆蕭紅」(⑦附件之四)
- ①8 景宋「追忆蕭紅」(《文藝復興》第一卷六期 1946. 7. 1)
- ①9 丁玲「风雨中忆蕭紅」(《北方文学》1980. 2)
- ②0 靳以「悼蕭紅与滿紅——附滿紅哀蕭紅詩」(《春秋》第一年一期 1944. 4. 15)
- ②1 趙聰『現代中国作家列傳』香港中国筆会 1975. 10
- ②2 Howard Goldblatt (葛浩文)「二“蕭”散記——又論蕭軍、再談蕭紅」(《明報》15卷1期 1980. 1)
- ②3 Howard Goldblatt「獷健和柔弱——又論蕭軍、再談蕭紅」(《明報》15卷2期 1980. 2)
- ②4 葛浩文著 鄭繼宗訳『蕭紅評傳』(香港文藝書屋 1979. 9)
- ②5 鑾瑋盧「一九四零年蕭紅在香港」(《明報》1979年)
- ②6 李輝英編著『中国現代文学史』(香港東亞書局 1979. 7)
- ②7 李輝英「蕭紅逝世三十周年」、「有関蕭紅、田軍的文章」(『三言两語』香港文学研究社「後記」1975. 4執筆)
- ②8 立間祥介「蕭紅について」(『中国現代文学選集』平凡社 1962)
- ②9 岡田英樹「魯迅、蕭軍の交流に關する覚え書き」(『外国文学研究』立命館大学46号1979. 7)
- ③0 魯迅「生死場・序言」1935. 11. 14 (『生死場』上海容光書局 1935. 12)
- ③1 胡風「生死場・讀後記」1935. 11. 22 (『生死場』上海容光書局 1935. 12)
- ③2 茅盾「論蕭紅的“呼蘭河傳”」(《文藝復興》光復版第十期 1946年)
- ③3 茅盾「呼蘭河傳・序」(上海寰星書屋出版『呼蘭河傳』1947)
- ③4 谷虹「呼蘭河傳」(《現代文学》第四卷一期 1941. 10. 25)
- ③5 辛知「蕭紅的『跋涉』」(上海《新民晚報》1963. 9. 24)
- ③6 王瑤『中国新文学史稿』上(新文藝出版社 1954)
- ③7 九院校編写組『中国現代文学史』(江苏人民出版社 1979. 8)